

令和 5 年 4 月 5 日現在

機関番号：32704

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23259

研究課題名（和文）高齢者のセルフ・ネグレクトに影響を及ぼす要因に関する日韓比較研究

研究課題名（英文）A comparative study between Japan and Korea on factors influencing self-neglect among the elderly

研究代表者

鄭 熙聖（JEONG, HEESEONG）

関東学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：80844092

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、日韓両国におけるセルフ・ネグレクトへの予防・支援モデルの構築を目的に、従来の研究において等閑視されがちであった当事者の視点及び心理・社会的要因を解明することに着目して、セルフ・ネグレクトとそれに影響する要因との因果関係を実証的に検討する基礎研究として位置付けられる。そこで、2019年度から日韓両国において、一人暮らし高齢者を対象にアンケート調査を実施し、分析を行った。一方、日本では新型コロナウイルスの拡大により調査が中止になるなど計画通りに進めることができなかった。研究の結果は論文としてとりまとめ、日本と韓国の学会誌等に投稿し、計4編が掲載された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、セルフ・ネグレクト研究において、従来の研究では等閑視されてきた当事者の視点と心理・社会的要因がいかに重要な要素であるかを実証的に検討したことが成果としてあげられる。具体的には、高齢者が危機的ライフイベントを通してセルフ・ネグレクト状態となり、心理的要因が媒介変数として有効に影響を及ぼすこと。なお、セルフ・ネグレクトの程度が悪いほど自殺念慮の程度が高いことや、手段的日常生活動作（IADL）とセルフ・ネグレクトの関係において情緒的サポートが有意な調節効果をもつことを明らかにした。これらの成果は学術的にも社会的にも重要な知見を与えるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop a prevention and support model for self-neglect in both Japan and South Korea. By focusing on the perspectives and psychological and social factors of the individuals, which have been often overlooked in previous research, the study aims to empirically examine the causal relationship between self-neglect and its influencing factors as a fundamental research. In 2019, a survey was conducted on elderly people living alone in both Japan and South Korea, and the data were analyzed. However, the survey could not proceed as planned in Japan due to the spread of the COVID-19 virus. The results of the study were summarized in four papers, which were submitted to academic journals in Japan and South Korea.

研究分野：高齢者福祉

キーワード：セルフ・ネグレクト

1. 研究開始当初の背景

先駆的にセルフ・ネグレクト研究に取り組んできたアメリカでは無意図的なセルフ・ネグレクト行為のみを認める傾向がある。学術的にもアメリカにおけるセルフ・ネグレクト研究の調査対象は、あらゆる精神疾患と認知症及び障害を抱えている高齢者となっている。返って、意図的に、あるいは非意図的にセルフ・ネグレクト状態になった場合、その人々は支援の対象に含まれない可能性が非常に高い。なお、ほとんどのセルフ・ネグレクト高齢者に対し、社会では精神的な問題を抱える存在として捉えられる偏見が助長される恐れがある。

しかしながら、鄭 (2018b) は、これまでに行われたことがない当事者へのインタビュー調査を通じて、高齢者のセルフ・ネグレクトの背景には、「精神的・認知機能的要因」だけでなく、それらの要因と定年退職・離婚・家族の死・事故・転倒などの「危機的ライフイベント」と絡み合っ生じる場合が多く、さらに「危機的ライフイベント」が起こった後には「孤立・ひきこもり」及び「無気力・生活機能低下」を経て徐々にセルフ・ネグレクトの状態に至ることを明らかにした。こういった結果から、本人の意志で意図的にセルフ・ネグレクトになったように一見、見える人でも、そこには本人の事情により仕方なく不本意ながらセルフ・ネグレクト状態に陥った人も多く存在することが考えられる。

要するに、高齢者がセルフ・ネグレクトに至った背景として、国際的には医学的モデルが中心となって検討されてきた一方、申請者はこれまでほとんど明らかにされていない心理社会的モデルの視点に着目した影響要因の解明に取り組んでいきたい。それが本研究の着想に至った経緯である。心理社会的モデルの視点に基づくセルフ・ネグレクト研究は、専門職がセルフ・ネグレクト事例にどの時点でどのように介入すれば良いかを具体化することができ、それはより効果的な予防・支援モデルを提示するための理論的根拠になる。

2. 研究の目的

研究の目的は、日韓両国において高齢者が社会的存在として希望と尊厳を保持しながら安全・安心に暮らせる社会の実現を目指して、高齢者のセルフ・ネグレクトを断ち切る予防・支援モデルを構築することである。

セルフ・ネグレクトのリスク要因に関する研究は現在に至るまで医学分野を中心に蓄積されており (Abrams et al. 2002; Pavlou et al. 2008; Dong et al. 2016), そこから精神的問題や障害がセルフ・ネグレクトに影響を及ぼすことが明らかになった。一方、本研究では、これまでほとんど明らかにされていない、セルフ・ネグレクトと心理社会的要因との関係を実証的に検討し、それを根拠としてセルフ・ネグレクトの予防・支援モデルを提示する点に学術的独自性と創造性がある。こういった結果は、セルフ・ネグレクトの潜在的リスクを有する高齢者の早期発見・早期介入に活用できる基礎的な資料になると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、先行研究の知見を踏まえて、セルフ・ネグレクトと心理社会的要因との関連を仮定した因果関係モデルを定量的に検証するための日韓比較調査である。これらを検証するため、2019年度から日韓両国において、一人暮らし高齢者を対象にアンケート調査を実施した。韓国では2019年10月から11月までA市に在住する独居高齢者406名を対象に訪問面接調査を実施し、日本では2020年3月から10月までB市に在住する高齢者を対象に郵送調査を実施した。しかしながら、日本においては、新型コロナウイルスの拡大により調査が中止になるなど計画通りに進めることができなかった。調査票は131部が回収された。

以上の調査から得たデータは、「SPSS 24」と「Mplus7.31」を用いて分析を行った。

4. 研究成果

この研究の主な成果としては、セルフ・ネグレクト研究において、従来の研究では等閑視され

てきた当事者の視点と心理・社会的要因がいかに重要な要素であるかを実証的に検討した点があげられる。具体的には、1)高齢者が危機的ライフイベントを通してセルフ・ネグレクト状態となり、心理的要因が媒介変数として有効に影響を及ぼすこと、2)手段的日常生活動作(IADL)とセルフ・ネグレクトの関係において情緒的サポートが有意な調節効果をもつこと、3)セルフ・ネグレクトの程度が悪いほど自殺念慮の程度が高いこと、を明らかにした。

以上の研究成果は学術的にも社会的にも重要な知見を与えるものと考えられる。これらの成果は論文としてとりまとめ、日本と韓国の学会誌等に投稿し、計4編が掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Jeong Hee-Seong, Maeng Joon-Ho	4. 巻 75
2. 論文標題 The Influence of Stress of Critical Life Events on Self-Neglect in Elderly Living Alone: The Mediating Effect of Sense of Mastery	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Korean Journal of Gerontological Social Welfare	6. 最初と最後の頁 63 ~ 83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21194/kjgsw.75.3.202009.63	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 鄭熙聖	4. 巻 22(12)
2. 論文標題 セルフ・ネグレクト高齢者への心理社会的支援の重要性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鄭熙聖	4. 巻 132
2. 論文標題 韓国独居高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関係	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 評論・社会科学	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2020.0000000083	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鄭熙聖・孟浚鎬	4. 巻 34
2. 論文標題 独居高齢者の手段的日常生活動作がセルフ・ネグレクトに及ぼす影響に関するソーシャルサポートの調節効果：老人見守り基本サービスの利用者を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Korean Journal of Care Management	6. 最初と最後の頁 117-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.22589/kaocm.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------